

フィリピンの貧困問題を 目の当たりに

うず高く積み重ねられたごみの山。大人も子どもも皆、その中を黙々と歩き回り、電気部品やプラスチックなど、お金になる物を探している。

「すごいにおいがする…」

フィリピンの首都マニラから南に約400キロ。イロイロ市のカラフナンごみ廃棄場を視察したのは、北陸3県の高等専門学校と工業高校の8人の先生たち。今年8月、JICA北陸の教師海外研修の一環で、この「ごみ山」を訪れた。日本では考えられない…。ごみ拾いで生計を立てる人々の生活に衝撃を受けていた。

今回の研修のキーワードは「技術系グローバル人材の育成」。北陸はコマツやYKKといった大企業の部品製造を担う中小企業が多い。その技術力には定評があり、アジアを中心に海外展開が進んで

世界とつながる 教室

北陸企業の海外展開を 担う人材を育てる

多くの中小企業が拠点を構える北陸地域。海外展開が活発化する中、その成功の力を握るのが「人材」。今年8月、若手技術者の学び舎である高等専門学校と工業高校の先生たちが、海外展開の戦力となる人材育成のヒントを探しにフィリピンを訪れた。

いる。その国の文化を理解しながら、現地の従業員と共に働く。北陸地域では、そんな企業の海外展開に不可欠な「技術系グローバル人材」の必要性への認識が高まっている。昨年11月には、石川工業高等専門学校と金沢工業高等専門学校が「技術系グローバル人材」をテーマにセミナーを開催。理工系学生や教員などが参加し、JICA北陸も「国際協力という仕事」と題して講演を行った。

しかしここで問題が。「内向きの若者が増えていると言われるように、将来

海外で働くことをイメージしている生徒は少ない」と、不二越工業高等学校の上島賢秀先生は現状を話す。そこでJICA北陸は、将来の技術者を育成する先生たちに途上国の「現場」を知り、人材育成のヒントを得てもらおうと、今年度の教師海外研修のプログラムを工夫することにした。

経済発展を担う人を 育てる現場へ

ごみ山に象徴されるように貧困に直面

するフィリピンだが、もう一つの顔がある。それは新興国として、経済発展を遂げる姿だ。マニラ市近郊のフォートボンフィアシオ地区を訪れると、目の前には高層ビルが立ち並んでいた。「都市と地方のギャップが大きい」「発展のエネルギーを感じる」など、参加者から驚きの声が上がった。

フィリピンはさらなる工業化を目指す。まさに今、人材育成に力を入れている。その一環として、教育制度改革では、初等教育6年、中等教育4年の後に、新たに2年間の大学進学コースと職業訓練コースを設置することになった。

この日、職業訓練コースを試験的に導入しているマニラ首都圏ケソン市にある



ドン・アレハンドロ・ロセス科学技術高校で生徒と交流

ドン・アレハンドロ・ロセス科学技術高校では、職業訓練コースで自動車のエンジン整備を生徒に指導していた



三菱モーターズ・フィリピンの自動車工場を見学。「進出して約50年と聞いて驚いた。海外展開の成功例ですね」と話す先生たち



フィリピン大学工学部でも日本の教育制度について紹介し、意見交換を行った

ドン・アレハンドロ・ロセス科学技術高校を訪れた先生たち。自動車整備や溶接、木工などの技術を約1700人の生徒が学んでおり、日本の旗を振って歓迎してくれた。日本の教育制度について紹介すると、「日本の高校のようにインターンシップを導入したいが、受け入れ先の企業はどう決めているのか」などと活発に質問が飛んだ。

また、青年海外協力隊員がコンピューター技術を指導するガバトゥアン国立総合高校や、フィリピン大学工学部も訪問。富山高専専門学校の梅伸司国際教育センター長は教育関係者との意見交換を通じて、「日本の工業高校の教科書を翻訳して紹介するなど、フィリピンの工業化を担う人づくりを手助けできるのでは」と感想を話した。

海外で働く可能性を 広げるために

「日本から距離が近くて英語も通じる。フィリピンは日本企業にとって、投資先

の穴場なのです」。これはフィリピン日本人商工会議所を訪問した時に、藤井伸夫副会頭から聞いた言葉だ。「海外で活躍する技術者を育てる側の人間として、世界の経済・社会状況をもっと知らなくては」と先生たちはうなずいていた。

続いて訪れたのは、マニラ近郊を拠点とする日系企業の三菱モーターズ・フィリピンの自動車工場。フィリピン国内向けに3つの車種が生産されており、現地の従業員835人に対して日本人は11人。「現地の人々と円滑に仕事を進めるには、フィリピン人だから、日本人だから」といった先入観をなくし、信頼関係を築くためのコミュニケーションが大事なんです」と福井工業高等専門学校

の山本幸男教授は振り返った。今回の研修を通じて、「実際に現場で経験する大切さを知った」という先生たち。これからは、海外の工場でのインターンシップや途上国へのフィールドツアーを企画したいと意気込む。北陸から世界へと羽ばたく若い力をはぐくむべく、北陸の先生たちの挑戦が始まった。



カラフナンごみ廃棄場でごみを分別販売する人々。彼らの生活向上を支援する日本のNGO LOOBの活動も見学した

※日本国内で開発教育／国際理解教育に関心を持つ教員を開発途上国に派遣する研修プログラム。JICA事業などの視察を通じて得た経験を、未来を担う子どもたちに教育現場で還元してもらうことが目的。日本全国のJICAの国内機関が実施している。